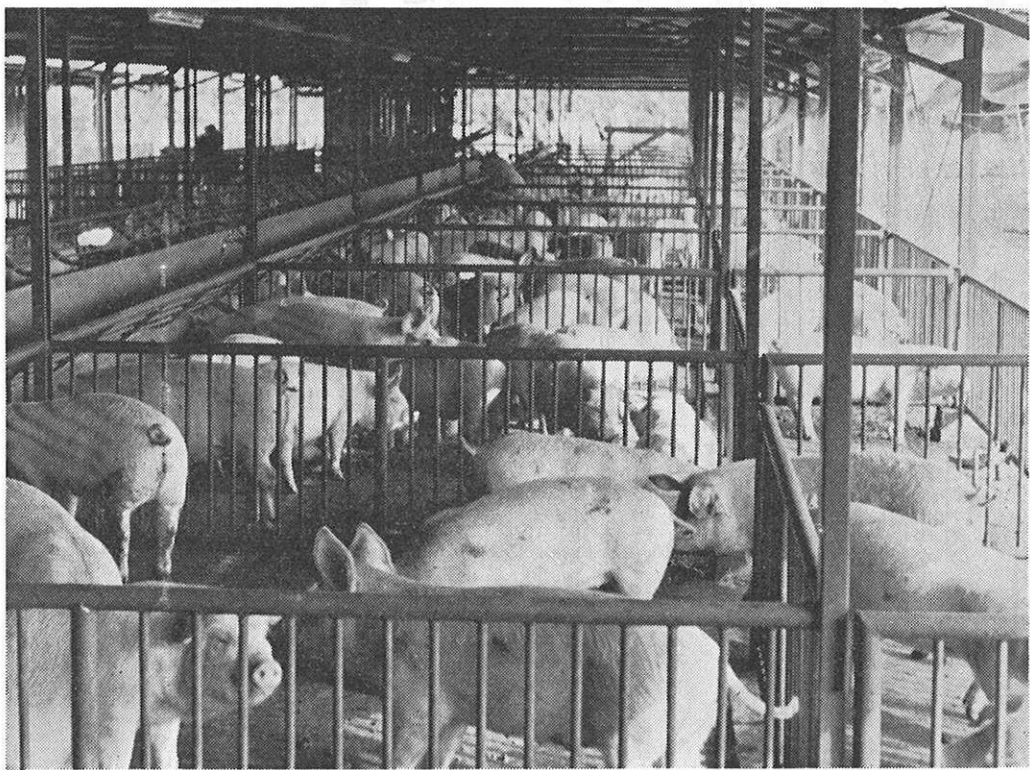


△豚の経営は購入飼料高のため大型経営が望まれている。V



専業農家は約千八百戸で第二種兼業農家が約一万一千戸とかなり多く、米・麦・甘藷等の普通作中心では自立経営が困難で、柑橘等の成長部門の規模拡大でこれに対応しようとしているのか天草農業の現状と云えよう。

また天草農業の姿を粗生産額の面でもとらえてみると、昭和三十九年度で五七億二〇万円で県の粗生産額七百三十六億六千万円に対して僅かに七、八%であって農家戸数の比一四、七%に軽べて見ると著るしく生産額が低いということが言える。

ここで更に天草農業の特色をはっきりさせる意味で二、三の問題点に触れてみることにしよう。

■昭和四十年における圏域内の耕地面積は約一万三千餘、その耕地率は一五、一%となり、県平均の一八、一%に比してかなり低位にある。これは山林面積約五万三千餘、林野率六五、四%と山林面積が大きいことに原因している。

■同じく昭和四十年における水田面積は六百餘、普通畑約四千七百餘、樹園地約千八百餘となっているが、昭和三十五年に対比して、普通畑は八五、六%に減少し、樹園地はこれと逆に三五、五%の増となっており、みかん増植の熱意がうかがわれる。

■所得水準が低いことにより、生活環境の整備がくり返されている。

■天草五橋開通に伴う輸送能力の増

わけである。そこで、このような事態に対応するため、農業構造改善事業を補完することをねらいとして昭和三十九年度から農業的自然条件に恵まれた地域について、農業経済圏整備のための施策を講ずることとなり、全国で先ず、茨城、霧島の二地域について、パイロット的に農業経済圏整備基本計画（マスタープラン）が樹てられることになった。これが農業経済圏整備事業のはじまりである。

熊本県としては、経済交流、社会的条件特に交通運輸の条件、農業関係施設、農業経営地帯区分、農業生産の展望及び各種主要指標などを勘案して県下を十一の農業経済圏に区分し、このうち柑橘の増植を中心に生産から流通への対策の必要性に迫られ、さらに昭和四十一年度から開通された天草架橋による輸送能力の増大が期待されるとともに、地元を受け入れ体制も完備していると見られる天草農業経済圏を対象として事業にとりくむことになった。

この天草農業経済圏は大矢野町を除く二市十二町の範囲で、旧町村数では五十四に及んでおり総人口は約十八万人で、県総人口の一〇、二%に当り、総就業人口約八万人で五六、五%が第一産業に従事し、このうち八一%が農業者でありこれは就業人口の四五、七%に当る。また圏内の農家戸数は昭和四十年において約二万三千戸となっており、過去十一年に約三千戸の減少が見られ、このうち

### 経済圏整備の基本構想

#### ■広域重点作目と生産目標

天草の農業振興に当って、その柱となる広域重点作目については、農業生産の



＜共同選果場の設備も近代化されて……＞

現状を基礎として、将来の展望を行ない、農業粗生産額の高位九品目（甘藷、柑橘、たばこ、米、やさい、麦類、豚、鶏、肉用牛）のうちから選定することにした。

まず圏内の柑橘については、昭和四十五年において、約三千九百餘に到達するものと見込まれ、植栽面積、生産量とともに対県比二六%で県下最大のみかん生産地となるものと思われ、これを中心として他の作目を組み合わせた複合経営を目指している。

やさいについては、天恵の温暖な気象条件を生かして、過去においてもかなりの実績をもっており、水稲部門における早期栽培の伸びと相関しながら、やさい生産は着実に伸びており、米作との複合経営及び畜産経営との複合経営で将来はかなりのウエイトをもつことになる。

次に豚の飼養については、古くから農漁家の副業として盛んで、一時黄豚の悪評に悩まされたものの、その後

急速に飼養技術も向上し、次第に銘柄の名声を高むに至り昭和四十年の統計によると県下の飼養頭数の二五、八%を占むるに至り、加えて系統共販も近年急速に進み、これを背景に生産から流通段階の近代化を計画することになっている。

以上述べたように、成長部門の選択的拡大が本計画の柱となるわけであるが、米については、飽くまで農業経営の基幹であり、これまで天草農業の大宗として貢献し、戦後の二条培土栽培及び早期栽培を始めとする技術革新によって飛躍的に生産が伸び、主食の島内自給に明るい見通しをもたらしたが、このことについても生産の合理化と生産の増大を期する予定である。

また、甘藷については、一部柑橘への作付転換が不可能の地域も多く、近年やや減少の傾向にあるが、なお昭和四十年においても、約三千五百餘が維持される見通しであり、比重も高く、普及率も九三、一%を占めていることから、甘藷生産の合理化、流通機構の改善のための施策が重要である。

以上五重点作目について簡単に解説を試みたが、圏域内における農業生産の推移と将来の見通しを昭和三十五年及び昭和四十五年を表示すると別表(一)のようになる。

■経済圏整備事業のあらまし

天草農業経済圏の整備については、その主なねらいを流通機構の合理化に抜本

的な対策を講ずることにおいており、まず柑橘部門については、流通のなめなす広域大型共同選果施設の計画的な配置と、果実の加工比率の増大にともなう加工処理のための農産物加工施設の設置、甘夏みかんの販売対策の一環としての冷温貯蔵施設を東京都近郊に設置することにより流通対策に万全を期することにした。

次にやさい部門については、整備された系統農協の共販体制を基調に、集出荷体制の近代化合理化を進めるため、コンビューター設置の共販センター及びこれと一体となって機能するやさい集荷選別所の設置を計画した。

肉豚部門については、系統農協を中心として、生産から流通段階に及ぶ近代化を推進するため、肉用仔豚供給センター及び屠畜場を整備する方針である。

更に水稲部門については、農業用水の開発及び調整を行ないながら、早期栽培面積の拡大と栽培技術の向上と並行しながら生産性の向上を図る方針である。

一方甘藷部門については、系統農協澱粉工場（八工場）の在り方を再検討し、六工場について統合新設を図ることにした。

以上、近代化施設整備のあらましについて説明してみたが、このような施設の整備は、道路網の整備を行なうことが重要であるので、産地から農業近代化施設、及びターミナルセンターとの間を最